

近世から現代へのフランス医学の流れ

小林, 晶
フランス整形災害外科学会 : 名誉会員

<https://hdl.handle.net/2324/1854782>

出版情報 : 『医学のうねり』セミナー : 西欧医学での医学教育・医療. 第5回, pp.1-, 2017-10-14. 九州大学医学歴史館
バージョン :
権利関係 :



近世から現代へのフランス医学の流れ

フランス整形災害外科学会名誉会員 小林 晶

近世のフランス医学の淵源は 16 世紀のアンブロワーズ・パレに求めることが出来る。当時は外科医が内科医より下の階層と見做されて蔑視され、理髪外科医が活躍していた。パレ自身も理髪外科医であったが、臨床的考察、技術の発想、実践は当時としては抜群のものがあり、今日でも有用な事項が多々見られます。「臨床外科の父」と言える先達である。

18～19 世紀のパリでの医学はきわめて発展し、全欧州の医学徒の憧れの的であった。演者が専攻する整形外科学でも「オルトペディ」として 1741 年ニコラ・アンドリが世界に先駆けて造語、提唱したもので、現在でも使用されている伝統的な名称である。

世界を揺るがした 1789 年のフランス革命は医学界をも巻き込み、医学教育・医療を一新して、漸く内科医の外科医への認識を改めさせる契機になった。新しい外科アカデミーが新設され、新医学部も発足しこの制度の一部は、なおこの伝統は今日も残存している。

医師養成の根本は病院中心の医学として発足、発展した。入学早々から臨床教育即ち患者を診る、触れるという実践、観察、体験を行わせ、基本を診察、病理解剖、統計においた。

当時の医学部長フルクロワは「あまり読むな。見ることを多く」することを勧め、有名な精神科医ピネルは「病気を見ずして、病人を診よ」と戒めた。これを後年、医史学者アッカークネヒトは、いみじくも「病院医学」と名付けた。あまり図書館医学や実験医学に偏寄らず、専ら患者と相対する実践を重んじた。この実践的臨床医学の魅力が多く、ヨーロッパからの留学生を引き付けた。

この時代を中心になったのは、内科ではビシャ、ピネル、コルヴィザール、ルイらであり、外科医はドソー、ギヨーム・デュピュイトランであった。パリ、オテル・ディウは外科系のメッカとなり、例えば技術的に困難な直腸癌への外科的アプローチをすでに行って、評判は欧州全体から患者が集まる一大センターとなった。「門戸は能力ある者に開かれている」が彼のモットーであった。

一方、ビシャは人体組織に着目し、顕微鏡の無い時代に疾病の原因

を組織に求め、病院医学は理学的検査と肉眼的病理解剖学で多く実績を挙げ、後のドイツ医学にも ―例えばウイルヒョウ― 影響を与えた。また、ピネルが精神病患者を閉鎖病棟より解放したことは、近代精神医学の曙となった。

しかし、「病院医学」は臨床面では多くの実績を挙げたが、50年を経過して袋小路にはいった。即ち、確かに外科系の勃興はみられたが、基礎医学、内科系は袋小路に入り、深い病因論の展開は不十分であった。このため 1850 年代のアングロサクソンの人たちは寧ろドイツに向かい始めた。

1870 年以後、ルイ・パスツールやクロード・ベルナールなどの努力で、隣国のドイツの興隆に危機感を持って、科学系の学部・研究所の増設、医学生の基礎教育に力を入れ始めた。この事実は臨床偏在が招く弊害の現れでもあった。細菌学界におけるカルメット、エルサンほかの業績はドイツ学派に比肩しえるものであった。

この時代での臨床面の特徴の一つは、サルペトリエール病院学派の神経病学における貢献である。シャルコー一派の業績は今日に至るまで世界に誇るべきものとなっている。ブローカやマジヤンディのような脳生理・病理の研究も異彩を放っている。

第二次大戦後は先ずジュデ兄弟の革新的発想を挙げなければならない。特に弟のロベールの活躍は瞠目に値するものであった。彼の示唆に富む感慨の言葉を紹介しておきたい。「何事も実行する前には、不安としか言いようがない感情がよぎる。この感情は時に抑制できないもので、これは事実を昔からの陳腐な説明で、無知を隠蔽する繰り返しに過ぎないことが多い。この不安感は全ての研究の初期の動機ともなり得る。先輩の歴史を顧みてこそ、この感情を拭い去ることが可能なのである」と述懐している。この言葉は、革新とは不安を感じても、冷静な裏付けでブレーク・スルーが達成できることを示している。

最後にフランス人の教育における哲学の重要性について言及したい。中等教育から高等教育に入るには、バッカロレア試験を経由しなければならない。これには文理系を問わず哲学の受験が必須となっている。このことは我が国の医師の養成に参考になると考えるので紹介する。